



サキの話

菌糸類の研究をいつ始めたのかサキは覚えていない。
武術の鍛錬を開始したのと同じぐらいだったはずである。
しかしそうすると立って歩きはじめたぐらいである。
そんなはずはない。

ここ最近では地上と宇宙の居住地で同程度の新種が発見されるので、
サキが年間で地上と宇宙にいる期間もちょうど半々程度になっていた。

この時代、地上と上空を行き来する人は比較的珍しくなっていた。

今回は自然重力下、比較的乾燥した地帯の雨期である。
この時期だけ、緑が増える。いい季節であるが、来年のこの
時期までしばらく地上に降りられないと思っていた。

最近始めたコケ類の研究手法をさがすためにこもるからである。
菌糸類では自作のAIで特殊な走査方法を使用していたが、
その焼き直しで済めば話は早いはず。

そのほかにも、軍事顧問の仕事が増えていた。
16歳で個人国家として独立したサキに興味を示すのは
同じような個人国家に限らない。

もっとも、その軍事顧問の仕事が地上を走査する際には役に
立っていた。セキュリティに絡んだ情報を各国が一般の
研究機関には出しづらいからである。

おかげでたいした苦勞もなく、十分な収入が得られていた。

ここで接近物の警告が上がってきた。
研究道具はすでに片づけたあとである、あとはかねてよりの
場所に移動するだけだった。アナログな日よけの帽子に
アナログなシャツ、短パン、その下に光学迷彩。

雑な接近に思えたのは相手によほど自信があるからだろうか。

ウォーミングアップも兼ねて軽く走りながら開けた場所へ着いたとき、その相手も走ってきた感じだった。アンドロイドでもアップするのかな、などと考えているうちに距離を詰めてきた。

民間用に偽装した軍事タイプ。しかし、見たところ武器はない。もちろん、そんなものを持っていればここにつく前にキャッチされているが。

予想はしていたが、話しかけてこないところを見ると交渉するつもりは全くなさそうだ。短時間でケリをつけようとしてくる。そして、相手はこちらの実力を知らない。

ただ、この瞬間はいつも緊張で手が痺れる感覚がある。いつも最初の一分が肝心だった。